

書 評

エリゼ・ルクリュ著，柴田匡平訳
『ルクリュの19世紀世界地理 第2期セレクション1 北アフリカ第一部—アフリカ総説，ナイル川流域：大湖沼地方，エチオピア，スーダン，エジプト—』

古今書院 2019年11月 609頁 36,000円＋税

5巻からなる第1期セレクション¹⁾に続き，第2期の刊行が開始された。本巻は，原著『新世界地理—地球と人間—』の第10巻(1885年刊行)に該当する。シリーズ中最短の巻(それでも口絵4葉，図版111葉，挿画57枚を収める)であり，章構成も以下のように簡潔である(括弧内の頁数は訳書のもの)。

第1章 アフリカ総説(49頁)

第2章 ナイル川流域(55頁)

「訳者あとがき」によれば，本シリーズでは河川流域単位の記述が散見されるものの，一巻が単一の河川流域にあてられるのは本巻のみという。その第2章の節構成(以下○内数字で表記)と頁数は，①流路(66頁)，②アフリカ大湖沼の地方(31頁)，③河川地方(32頁)，④ソバト川およびヤル川流域(10頁)，⑤エチオピア(140頁)，⑥上ヌビア地方(55頁)，⑦コルドファン地方(18頁)，⑧ダルフール地方(13頁)，⑨ヌビア地方(33頁)，⑩エジプト(157頁)となっている。ナイル川の流れて沿って源流から三角州までが叙述され，とくにエチオピアとエジプトの部分が厚くなっている。

まず第1章では，「アフリカ」の名称に関する議論の後，「旧世界のうち最も輪郭が明瞭」であるアフリカ大陸と，アジア・ヨーロッパ・南アメリカ・オーストラリアとを対比させている(1-4頁)。当時，「土地の平均標高はヨーロッパやアジアよりも高い」と推定²⁾されていたアフリカでは，大型河川の流路が「比較的船舶の利用に向かない」ため，「すべての交易民族の全般的な動きがアフリカを迂回する原因になった」。次章で取り上げられるナイル川をはじめ，ニジェール

川・コンゴ川・ザンベジ川という「四大河川」³⁾には，長らく大陸中央部に「同一の水源」があると考えられてきたが，その認識はようやく改めつつあった(7-13頁)。気候については，等温線・降水量分布・植物区の図と合わせ，「アフリカは北から南にかけ，灰色の帯と，濃淡のある緑色の帯が交互に切り分ける」と説明し，「特徴的な樹種」としてバオバブやアカシアの名があげられる(16-21頁)。「諸大陸のうち最も重量感のあるアフリカ大陸は，動物も最大級」であるが，すでに「絶望的な狩猟」が進行中で，「イギリスが年700トンの象牙を輸入すると，5万頭のゾウを殺さねばならないと算出」されていた(24-25頁)。

「アフリカはまるで全住民が狭義の黒人であるかのように，しばしば「暗黒大陸」の名で呼ばれていた(27頁)時代背景の中，黒人は「ヨーロッパ人よりも痛みに鈍感」，「神経はヨーロッパ人ほどこまやかではなく，震えたりはしない」といった「医学的所見」や，人類学者たちがブッシュマンなどの「小柄な民」に関し，アフリカを「最も猿に近い人類の大陸であるとみてきた」という言説が紹介される(31-32頁)。しかし，そのような「人種的なおごり」とは別に，ナイル川流域は「人類共通のゆりかご」であり，エジプト以外のアフリカも含め，「自然に対する人類の征服に，家畜の飼育や農耕でもって一翼を担ってきた」(その例としてモロコシ・ナツメヤシ・コーヒーなどがあげられている)(34-35頁)。ルクリュは，太古から「奴隷のうち最も珍重され」ていた「アフリカ人奴隷の条件を最も悪化させたのがヨーロッパ「文明」の影響によるものである」と指摘し，「アフリカ大陸の広大な部分が人間の狩り場に変容し，「白人」という言葉は「人食い人種」の類語になった」(41-42頁)と自らが属する西洋文明に厳しい⁴⁾。「何らかの地理学的な征服のニュースが届かぬ週はめったにない」と探検が進むかたわら，旅行家が「たとえ自分は望まざるとも，彼の後には商売人や兵士やらがついてくるのであって，彼は自分を受け入れ，抱擁してくれる人々を，前もって彼らに引き渡している」。そして，「政治的観点からみたアフリカは，すで

に単なるヨーロッパの属地」で、ヨーロッパ人は「彼ら自身がナイル川の沿岸住民から受け取ったこの文化を、別の形で黒人にお返しする番」となっている(46-49頁)。折しも1884~85年には、アフリカ分割のためのベルリン会議が開催されていた⁵⁾。ここまで約50頁の第1章は、アフリカ全体の自然や歴史の叙述として、今日も参考とすべきものを含んでいる。

第2章では、冒頭の①でナイル川とその流域の自然地理が述べられる。執筆当時、ニヤンザ湖(1858年到達のスピークがヴィクトリア湖と命名)がナイル川の源流であることは知られていた⁶⁾が、さらにその先の「ナイル川の発端」は探索中で、「まだ生まれだてのナイル川を目にした者はいない。あるいは、少なくともその河畔に暮らす人々は、自分たちの歴史的な役割をまだ知らずにいる」(51-52頁)という状況であった。その流入河川のうち最大のカゲラ川を現地住民は尊崇し、「渡し守は乗船に際し靴を脱ぐよう求めたため、スピークは長時間にわたり言い争わねば」ならず、「聖なる川の水深をグラント⁷⁾が測定するのにも許さなかった」(54-55頁)と、現地の慣習と外来の科学の対立がえがかれている。このヴィクトリア湖から下った白ナイル川は、現在のスーダンの首都ハルツーム(カルトゥーム)付近で、タナ湖⁸⁾を源とする青ナイル川と合流する。この両河川の対比として、「海までの流れを作るのは白ナイルだが、人間の糧をもたらす洪水を持ち込むのは青ナイル」[「白ナイルなくしてエジプトは無かったであろう。だが青ナイルなくしては、エジプトの素晴らしい豊穡さも無かったのだ」というベイカー(1864年にアルバート湖に到達・命名)の言が引かれる(75-76頁)。その下流の6カ所ある瀑流は「船舶の航行をはばむ」一方で、「これらの瀑流が河水を押しとどめ、乾期にも流れる水がなかったら、ナイル川は通年にわたる水量を維持したであろうか。デルタを形成したであろうか。エジプト文明は誕生したであろうか」(84-85頁)とその役割が強調される。とりわけアスワンの第一瀑流は、酷熱と温暖を分ける「[エジプトの戸口]として、有史のあけぼのから二つの世界の目に見える境界」であるとともに、「北回歸線にほぼ一致するみごとな偶然もそなえ」ていた(88-90頁)。ナイル川下流域の増水に対しては、「神

の復活として言祝いだ」り、「大事な水の先触れ」としてワニの拝礼がなされたりしたが、「今日では増水に備えるのはもっと容易になり、30~40日前にはカルトゥームから知らせがある」ようになっていた。反面、「ナイル川の低水位期には、最も遠い井戸の水位がナイルの川面よりも3~4メートルも高く」なり、「こうした土中の浸透水なしには、灌漑が遠隔地まで及ぶことはできないだろう」というごとく、このデルタの用水路や堰堤からなる「有機体の保全にはたいへんな手間」がかかっていた。このように「砂や粘土、陰鬱な岩山ばかりのふたつの沙漠が挟む一筋の狭い緑地は、アフリカ大陸の半分から運ばれてきた諸物質が作り上げ」ていたこと(108-115頁)が、20世紀の「開発」にあたっては軽視された。

次の②~④には、ヨーロッパ人による踏査がまだ及んでいなかった地域が含まれる。例えば、ルワンダ国は「この未踏地帯でおそらく最大の勢力」で、アラブ人などによる断片的な情報しかなかったが、「遅かれ早かれアフリカ大陸史に第一級の重要性を獲得するだろう」(127頁)と予想されている。他方、その北隣にあって、「ナイル川流域の高原部にある国家のうち、最もよく知られている」ウガンダ⁹⁾(128頁)については、「唯一ある程度の規模をもつ交易活動は、全面的にアラブ人とザンジバルの混血が牛耳って」おり、輸出品は象牙と奴隷であったが、「ゾウは追われて人里離れた密林に入り込んでゆくので」、「年を追うごとにますます多くの奴隷を人身売買を営む商人に引き渡さねば」ならなかった(134頁)。同様に宗教面では、「ニヤンザ湖や川、樹木、山の岩場に棲むとされる」善霊・悪霊や「天然痘を放つとされる神」、雷神などが信仰対象であったウガンダに、外国人ムスリムやキリスト教宣教師の勢力が浸透しつつあった(133-134頁)¹⁰⁾。ヴィクトリア湖南岸に住むスクマ人の間でも、呪術師が「大きな権力を享受」していたが、「くすりの人」とみなされ、その娯楽は黒人のものより強力と考えられた「ヨーロッパ人宣教師の到来により大打撃をこうむった」(121頁)¹¹⁾。今日のウガンダ北部および南スーダンにあたる③でも、「エジプトの役人という資格のもと、一帯の領主になった奴隷商人たち」は、「自ら村を襲うことは一切なく、部族同士の争いをけしかけ」、その捕虜を買

い取って「もっとゆるやかな隷属状態を保証」するという「外面的には人道的なふるまい」(150-151頁)が横行しており、「奴隷化と抑圧による人口減少」に見舞われていたボンゴ人は、「科学がまさに彼らを見出したとき、存在しなくなるのではとシュヴァインフルト〔ドイツの植物学者…評者注(以下同様に表記)〕は自問した」(169-170頁)。「ゴードンがエジプトに併合したある部族の代表団」は、奴隷狩りの被害をうけ、「お願いするのは、ただ出て行ってくれることだけ」で、真珠〔ビーズか…訳注(以下同様に表記)〕¹²⁾も友情も保護も不要と語っていた(186頁)¹³⁾。この地域は、後にファシヨダ事件(1898年)の舞台(187-188頁、現在のコドク)になり、20世紀に入るとコンゴ=ナイル分水界一帯に居住するニアムニアム(ザンデ)人や、白ナイル川上流域のヌエル(ヌアー)人(178頁)などを対象とする文化人類学の調査地ともなった¹⁴⁾。

⑤のエチオピア(アビシニア¹⁵⁾)については、「もろもろの民が波のように入り混じる巨大なアフリカ大陸のなかで、高い島状にそそり立つこの山寨は、ひとつの別世界を構成」し、キリスト教を受容・保持する点などで、「アフリカのヨーロッパなのだ」(191-192頁)と表現している。皇帝テオドロス2世が1868年に「イギリスの攻撃軍を向こうに回し、自由の身のまま自殺した」(259頁)後、エチオピアはヨーロッパや近隣諸国(1875~76年にはエジプト軍が2度侵入(269-270頁))を含む諸勢力のめまぐるしい合従連衡のまっただ中にあり、「人種間の連帯は友好のうちに達成できるだろうか。それとも、多くの混交の事例とおなじく、これもまた紛争と、虐殺戦争が先だってしまうのであろうか」(193頁)と、先は見通せなかった¹⁶⁾。多数派を占めるエチオピア正教に対し、カトリックやプロテスタントの布教は警戒され、テオドロス2世も「最初は宣教師、つぎに領事、それから兵士たちだ」との言辭を繰り返したという。エジプト軍の侵攻以降はイスラム教への反感もつり、「国内のムスリムは全員が外面上は国教会に属させられ」た。国内の聖地巡礼には「商売の本能も入り混じっており、巡礼地は同時に市場」になっており、エルサレムへの巡礼時には、ジグダで「エルサレムへの路銀を得るため、イスラームに改宗」し、「聖地に到着する

と、もういちど改宗した」という(239-244頁)。さらに、ファラシヤ人(ベタ・イスラエル)というユダヤ教徒の少数派は、「他のアビシニア人と一線を画し、別の集落や都市の区画」に暮らし、「商売気がまったくなく」、「誰もがモーゼの戒律に反するとして商取引を排斥」していた。その「宗礼は、現地キリスト教から借りた多くの典礼と混淆」しており、「誰からも迫害され憎まれるカースト」ではなかった¹⁷⁾。ほかにも「預言者モーゼの末裔を自称」しつつ「大岩の根元で特殊な祭礼を催すとも言われる」カマント(キマント)人は、「水運びや打穀夫を営み、ゴンダール〔1860年までエチオピアの首都〕のブルジョワ家庭に仕えて賤視される」が、彼らのおかげで「ゴンダールとその近隣都市が必要な物資を毎朝受け取れる」と、少数派の存在も含めて当時の社会が成り立っていたことが描写される(224-227頁)。「高原部の文明化したエチオピア人は、おもに言語と伝統が違うふたつの集団からなる」として、ティグレ(ティグリニヤ)語とアムハラ語があげられており(233-234頁)、エリトリア独立運動やティグレ人民解放戦線といった現代の動き¹⁸⁾は、この差異の認識の延長線上にある。

「狭義のアビシニア」の範囲外では、1875年から一時的にエジプトが奪取したエチオピア(現在)東部の都市ハラル(ハラール)の「住民はほぼ全員が商人で」、「シーア派の熱狂的なムスリム」であり、カートが「イエメンと同様に嗜好品として珍重され」、「この聖人たちの植物は夜も長く起こしておいてくれるため、アッラーを崇めることができる」とされていた。この「ハラルの周囲とオロモ人が耕す田園部で最大の作付け量なのはコーヒーの木」で、豆は「モカ種」として輸出される。ただし、「ハラルの住民はコーヒーを淹れるということがなく、樹皮を煎じて飲む」という(308-311頁)。同じくエチオピア南部のインナルヤ(エンナルヤ)地方でも、「谷の底と両側の斜面はまったくコーヒーの木の地方で、種名の由来であるカフファ地方〔現、エチオピア南西部〕よりさえ美木であり」、「コーヒー豆は王の専売で、その奴隷だけが森の中で豆を収穫し」、「市場で売って王の収入」にしていた(323-324頁)。このほか、「アデンから派遣された小勢の英軍守備隊が占領し」、「最近まで奴隷貿易の中心地のひと

つ」だったゼイラ（現、ソマリア）、「新たなフランス拠点」となったオボック（現、ジブチ）、「1870年にひとつのイタリア植民地を紅海に出現」させたアッサブ（現、エリトリア）など（311-319頁）、経済的にも政治的にも、アフリカ分割をともなう「近代世界システム」に現在進行形で組み込まれつつあった。

⑥～⑨では、今日のスーダンを中心とするナイル川中流域が主な記述対象となっている。帝国主義はこれらの地域をも席卷しており、クナマ人やバレア（ナラ）人（ともに今のエリトリア西部に居住）の「共同体のあいだには普遍的な平和があり、労働は尊重」されていたが、「エチオピア風の長衣やアラブ風のシャツが毛皮の上っ張りに取って代わり」、「最近までアフリカで最も幸福だったこれらの住民が隣人と結合し、もっと大きなナシオンを形成するには、血の海を渡らねばならないだろう」（346-351頁）と予見されている。パリの「庭園で人々が目にした「ヌビア人」は、ほぼ全員がカッサラ〔現、スーダン東部〕とその近傍の部族のベジャ人」（353頁）であり、「ベジャ人が好む武器は、両刃のまっすぐな剣だが、たいていドイツ製」（357頁）であった。また、コルドファン地方の「牛飼い」で「好戦的」なバツガラ（バッカーラ）人の間でも、「ゾーリンゲン産の剣やリエージュ産の小銃といったヨーロッパ製の武器」が「すでにおなじみ」だった（394-395頁）。スーダンのマフディー運動には、これらの民族、すなわち重税で「堪忍袋の緒が切れ」、「マフディーの最も熱烈な信奉者」となったベジャ人（353・359頁）や、「ムスリムきっての熱烈な信者で、マフディーの指導のもと、熱狂をもって聖戦に身を投じた」バツガラ人（395頁）などが参加していた。ヌビア地方のドンゴラに生まれたマフディーことムハンマド＝アフマド（440頁）は、1881年に白ナイル川の中洲アバー島（コルドファン地方）で武力闘争を開始し（391-392頁）、1883年には同地方のアルウバイド（オベイド）でイギリス人ヒックス率いるエジプト軍を殲滅したことで、「ヨーロッパ人の威勢も現地住民の目からは地に落ちた」（400頁）。マフディー勢力は、さらに本巻執筆の1885年にハルツームを制圧し、ゴードンを戦死に至らしめている（367-368頁訳注¹⁹）。こうして、「ここ半世紀以上にわたり

エジプト人は南方へ侵略し」、「とうとうスーダンを征服したと一時は信じられたが、併合した広大な領域は、まさにエジプト人の苛斂誅求が引き起こした猛烈な反乱のせいで、現在ほんのわずかしか」残らなくなっていた（331頁）²⁰。「エジプトによる征服と、それに続いたナイル川沿いの諸民族の全面蜂起」は、相たずさえて一帯を「イスラームの引力圏」に所属させ、「アラビア語が文明語」になるという影響ももたらした（341頁）。

奴隷貿易に関する記述はこの部分にもあり、紅海の港町サワキン（スアキン）に「アフリカ内陸から到着する奴隷商人は一般旅行者として申告し、妻妾だの召使だのが随伴する」が、アラビア半島から戻ってくると「離婚や脱走、思わぬ出来事により、家族も供の者も手から離れたと言う」と、その手口が生々しく語られる（379頁）。ダルフル地方には、「奴隷交易の中継地で、去勢施設がある」ことで「ムスリム世界に周知」であり、「沿道には、埋葬の手間さえかけずに遺棄された不幸な人々の白骨が散らばる」集落群があり、ナポレオンはエジプト遠征の際、「大キャラバンによるダルフルのスルタンとの交易の樹立を望み、商品と引き換えに「強健な17歳以上の黒人奴隷を2千人」発送するよう要求」していた（412-414頁）。ほかに出稼ぎとしては、「ヌビア人の若者が、エジプトの都市に富を求めて出かけ」、「ほぼ誰でも数をかぞえ、アラビア語を読み書きするので」好まれ、「こうした出稼ぎの貯金により、エジプトはヌビア地方の住民を養っている」が、「租税やあらゆる取り立てを通じ、エジプトは与えたものをはるかに上回って奪い返した」（432-433頁）という地域間関係があった。コルドファン地方の住民が電信線を「怖れることはひとかたならず、カルトゥームやエジプトまで声が聞こえるのを警戒し、電信線のそばでは話そうとしない者さえいるほどだった」（400頁）し、「神秘の言葉を漏らせば、頭に災いが降りかかるかもしれない」として「異邦人の前で母語を話すのを控える」アバブデ（アバブダ）人（436-437頁）もなお存在していたが、「文明」の波は着実にこれらの地域にも及んでいた。エジプトとヌビアの境界線がアスワンの第一瀑流からワーディハルファの第二瀑流²¹に移されてここに鉄道が敷設され、瀑流遡行の船の指揮を「カナダの河川に

おける「瀑布」を乗り越えるのに慣れたカナダ人とイロコイ族の船頭にゆだねた」ことは、「蒸気機関がこの星をどれだけ小さくしたかの明証ではないか」と評されている(444-445頁)。その下流にあるアブシンベル(現、エジプト)などの遺跡の姿は、写真彫板(446頁)²²⁾の形でより鮮明に知られるようになっていた。

最後の⑩は、「われわれの考え方の鑄型は、ナイルの川岸に発祥した」(449頁)というエジプトにあてられている。「ライプニッツがすでに1672年に記したように²³⁾、インド洋沿岸のすべての植民地領有の鍵」であったエジプトをめぐるフランスとの争奪の末、イギリスは「最後にはエジプトを政治面で征服すると同時に、両洋を結ぶ運河の、通商面の卓越性も確保した」。「イギリスが送り込んだ人々は絶対君主に近い存在」だが、「租税表への署名など、責任を負わぬほうが都合がよい一切の行政行為については、エジプト官僚の陰に隠れ」ていた。もっとも、「現在エジプトに居住し、金融資源を切り回し、産業を興し、新聞記事を書いたり、世論を誘導したりするのは、大半が大陸ヨーロッパの出身者」という事情が「イギリス当局の権力行使を制肘」してもいた(453-455頁)²⁴⁾。「知力でも、軍事力でも、金銭面でも、エジプトの本当の主人はトルコ人ではなく、ヨーロッパ人である」と記される状況のもと、とくに都市部で「原住民の人種を根本から変容させた」アラブ人や、「理数と資本の運用に真の才能をみせる」コプト教徒、それに「労働者」を意味し「エジプト人を自称する」ファッラーヒーンなど、エジプトでは多様な民族要素が入り混じっていた(488-498頁)。「もろもろの宗教がナイルの沖積層のように積み重なった国柄」ゆえ、「エジプト人は外面的にしかムスリム」ではないが、「キリスト教に敵対的な情宣の中心があるのはまさにエジプト領内で」、サヌシー教団の本院はジャグブーブ(現、リビア)に所在していた(500頁)²⁵⁾。

有史以来、スエズ地峡ではさまざまな開削の試みがなされ、ついに「キリスト教徒の太陽」と呼ばれる電気式の灯台」が照らし、「巨人的な造営物で、人類の英知の最大の作品」と賞される運河が1869年に完成した。その「交通量は、建設者たちの予想を上回って急増し」、エジプトの地政

学的重要性はいや増した。「船舶数からみて、スエズ運河はまるでイギリス専用の観」があり²⁶⁾、「イギリスは東インドへの海路が競争相手に握られるのを懸念したがゆえに、スエズ運河を確保した」(509-521頁)。もっとも同運河の開削がフランス人レセップスによって行なわれたように、同運河沿いのポートサイドは「住民や商業、習俗はヨーロッパ都市、さらにはむしろフランス都市でさえ」あり、「卓越言語はフランス語で」、「フランス語で教育を受け」る児童もいた(575頁)。エジプト全体でも「国内に卓越する外国語はフランス語だが²⁷⁾、新政権はとくにフランス人教授を標的に公教育予算を削減し、文民および軍事関係の学校でのフランス語使用を、多少とも長期にわたり締め出そうと狙った」(598頁)と、列強間の角逐は各方面に及んでいた。

ナイル川デルタには、低水位期には干上がる「ニーリー」と、近代発祥で乾季にも水が流れる「セイフィー」という二種の灌漑水路があった。「セイフィーの土地は、通常の氾濫期に先立つ3か月にわたり耕作され」、ムハンマド＝アリー(在位1805～48)治下で栽培が始まった綿花や、ゴマ・サトウキビなど「高価格品目にほぼ限定」されており、「これらの工芸作物から利益を得るのは国家の大立者連中と、エジプトの利払いを受ける富裕な債権者のみ」であった。しかし、「水路は随所で少しずつ泥が蓄積し」、「セイフィー水路がニーリー水路に変貌するには一年で足りるため、ファッラーヒーンの群れが何週間、あるいは何か月も浚渫に雇われ」ていた(505-507頁)。アメリカ南北戦争によるエジプト綿の好景気は終わっていたが、「かつては利用もされなかった綿実も、かなりの経済的重要性を得る」ようになり、「輸入するのはドーヴァーの工場群だけで、船荷をまるごと買い付け、食用油や石鹼の原料」にしていた。そのかわり、「土壌の洗脱が不十分なために塩分を除去できず」遺棄されたサトウキビ農場もすでに出現していた(594-596頁)。

スーダンのマフディー運動に先立ち、エジプトでは、「エジプト人のためのエジプトを！」を叫んだ軍の反乱、すなわちオラービー(ウラービー)革命が発生(600頁)したが、イギリス軍によって鎮圧された(1881～82年)²⁸⁾。あらゆる面で西洋文明がおしよせていたことは、同じ頁に収

められた挿画「カイロのシタデル地区」でムハンマド＝アリー・モスクの手前に描かれた線路と電信柱にも象徴される。そのような状況下、カイロのアズハルのモスクにある「世界最古の大学にはモロッコからヒンドスタン〔南アジア〕、ニジェール川からオクソス川〔アムダリヤ〕に及ぶイスラーム世界の全民族がみられ」（565頁）、イスラーム世界の一大拠点となっていた。1870年代以降、アフガーニーやその弟子ムハンマド＝アブドゥフなどによるイスラーム改革運動²⁹⁾がその緒についていたが、ルクリュも「力づくでヨーロッパ世界の一部にされたエジプトの、国民感情が絶えず高まっているのは确实」で、「外国人のあるじたちは、大陸ヨーロッパ出身者のコロニーだけでなく、ますます近代の思潮に動かされつつある現地住民に依拠せねばならなくなるだろう」（602頁）と考えていた。

「世界分割と植民地支配」という論考の中で、板垣雄三は「1884～85年の転換点としての意義」を強調している³⁰⁾。その指摘によれば、同年のベルリン会議によってアフリカ（ひいては世界）の分割が急速に展開した背景に、「エジプトでのイギリスの地位」をめぐる国際的問題があったという。オラービー革命やマフディー運動は、そうした「分割」過程への強い批判であり、その矛盾の露呈であった。期せずして1885年に刊行された本巻は、そのような世界史的事象を地域の側から検証する上で貴重な同時代の記録であるとともに、今なお亀裂の多いナイル川流域の「底流」を探る上でも有効な参照点となり得よう。もっとも、本巻の内容をなす諸種の地理的情報自体、探検家によるものをはじめ、帝国主義という時代の趨勢の中で集積された側面を有している。そのことに対し、当時の著者³¹⁾以上に、現代の読者たる私たちは自覚的でなければならない。

（三木一彦）

〔注〕

- 1) 既刊分は以下の通り。①エリゼ・ルクリュ著、柴田匡平訳『ルクリュの19世紀世界地理 第1期セクション1 東アジア—清帝国、朝鮮、日本—』古今書院、2015、814頁。②同上著・訳『同上2 北アフリカ第二部—トリポリタニア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、サハラ—』同上、2016、878頁。③同上著・訳『同上3 アメリカ合衆国』同上、2016、831頁。④同上著・訳『同上4 インドおよびインドシナ』同上、2017、917頁。⑤同上著・訳『同上5 南ヨーロッパ—シリーズ総説、ヨーロッパ総説、バルカン半島、イタリア、コルシカ、スペイン、ポルトガル—』同上、2018、1002頁。上記への拙評は、①歴史地理学58-3、2016、39-43頁。②同上59-3、2017、31-34頁。③同上60-2、2018、23-29頁。④同上61-2、2019、41-47頁。⑤同上62-2、2020、26-34頁。
- 2) 580mないし660mと推定されていた。実際は750mで、ヨーロッパ（340m）よりは高いが、アジア（960m）よりは低い。
- 3) 宮本正興・松田素二編『新書アフリカ史』講談社現代新書、1997、63-178頁では、この四大河川（ただしザンベジ川にはリンポポ川が加えられる）の流域ごとに「川世界の歴史形成」がえがかれている。
- 4) ルクリュはかつてアメリカ合衆国に滞在し、「黒人法と黒人奴隷」（1860年）と題する論考では奴隷制を糾弾している。前掲1) ③ 793-828頁。
- 5) ケニアの歴史家オゴトは、「一大陸の国家がより集まって、他の大陸の分割と占領について、これほど図々しく語ることが正当化されると考えたというのは、世界史に先例がない」と評している。前掲3) 287-288頁。
- 6) スタンレーがヴィクトリア湖の周航によってそこがナイル川の水源地であると確認したのは1875年である。H. M.スタンレー著、宮西豊逸訳『暗黒大陸』（大内兵衛ほか監修『世界教養全集23』平凡社、1961）、304-322頁。
- 7) 1860～63年のスピークの探検に同行した聖職者・将校である。エルスペース・ハクスリー著、長島信弘訳『図説 探検の世界史11 ナイルの彼方へ』集英社、1975、92-93頁。
- 8) 1770年にタナ湖上流の泉に到達したブルースは、そこをナイル川の源流と信じていた。ブルース著、長島信弘・石川由美訳『17・18世紀大旅行記叢書10 ナイル探検』岩波書店、1991、394-411頁。

- 9) 今のウガンダ中南部にあったブガンダ王国をさす(23頁訳注)。
- 10) ウガンダは1894年にイギリス保護領、ルワンダは1899年にドイツ領となった。
- 11) 他方、アルバート湖東岸のニョロ人のように、宗礼が「純然たる呪術」であり、「遊行するカーストに属する「吉兆占いの女たち」が頼られる社会もあった。ドイツの探検家エミン・パシャは、これをロマによる「ジブシー占い」に相当するとみていた(142-143頁)。
- 12) エリック・ウィリアムズ著、中山 毅訳『資本主義と奴隷制』ちくま学芸文庫、2020、137頁によれば、ヨーロッパからの奴隷取引用船荷の中に「安びかもの」とよばれる雑貨類があり、奴隷海岸ではガラス製品やビーズ玉に対する需要が絶えなかったという。
- 13) 訳注にもあるように、W. S. プラント著、栗田禎子訳『ハルツームのゴードン—同時代人の証言—』リプロポート、1983、86-88頁、に類似の記述がある。
- 14) E. E. エヴァンズ=プリチャード著、向井元子訳『アザンデ人の世界—妖術・託宣・呪術—』みすず書房、2001、630頁。同上著・訳『ヌー族の宗教 上・下』平凡社ライブラリー、1995、などがある。
- 15) 「アビシニア」については、「原義は「寄せ集め」や「烏合の衆」といった侮蔑的な意味をそなえるため、アラビア語を解する現地住民が喜んで受け入れるものではない」という(189頁)。
- 16) 1889年にメネリク2世が即位し、イタリアの侵入(1895~96年)を防いだことで、エチオピアの独立が維持された。
- 17) イスラエル建国以降、エチオピア内戦などをうけたファラシャ人のイスラエル「帰還」が進められたが、移住後、文化的差異や経済的格差の問題に直面している。綾部恒雄監修『世界民族事典』弘文堂、2000、566頁。なお、同書は本評に裨益するところ大であった。
- 18) 2020年11月にエチオピア政府軍がティグレ人民解放戦線の掃討を行ない、ティグレ州住民6万人超がスーダンへの難民となった。その難民にはティグレ人のほかにアムハラ人も含まれ、難民間での民族間対立も警戒されている。朝日新聞2021年2月5日付朝刊。
- 19) ハルツームの「共通語の座はイタリア語とアラビア語が争っていたが、対外交易はほぼ全面的にフランス人とギリシャ人の手中にあった」(368頁)。ハルツームでのゴードンには、彼自身がアラビア語を解さず、ギリシャ人商人ほかキリスト教徒からの情報に頼らざるを得なかったという「最大の弱点」があったといい(前掲13) 159-160頁)、本巻の記述と符合する。
- 20) 続けて、「いまやエジプト人にとって代わり沿岸の諸地点を占領するイギリス人は、いつか道路を建設し、平和的な再征服に乗り出すだろう」と予見されている。マフディー勢力は1898年に滅ぼされ、スーダンはイギリス・エジプト「共同統治」下に入った。
- 21) 現在のエジプトとスーダンの国境もここに位置する。
- 22) 「いわゆるグラビア」との訳注があり(447頁)、エジプトのテーベ(490頁)・アビドゥ(アビドス)(539頁)の遺物(浮彫)についても写真彫板が収められている。
- 23) マインツ選帝侯に仕えていたライプニッツは、ルイ14世の侵略を中近東に転じさせるために『エジプト計画』を執筆し、1672年に使者としてパリに赴いたが、その目論見は頓挫した。酒井 潔『人と思想191 ライプニッツ』清水書院、2008、36-40頁。
- 24) イギリスによるエジプトの実質的な保護国化は、後述するオラービー革命鎮圧後の1882年であったが、正式には1914年である。
- 25) 後にリビアにおけるイタリアへの抵抗運動を主導した。
- 26) 「1883年における通航船舶内訳」(t)(520頁原注)により計算すると、イギリス船が76%を占めていた。
- 27) 「1879年における新聞は29紙、うち仏語紙が9紙、アラビア語紙が7紙、イタリア語紙が5紙、ギリシャ語紙が3紙」との原注がある。
- 28) 指導者アフマド=オラービーは、革命の鎮圧後、スリランカに流刑となった。『佳人之奇遇』で知られる東海散士(柴 四朗)は、谷干城の欧米視察随行の途上でオラービーに面

会、さらにカイロを視察し、後に『埃及近世史』(1889(明治22)年)を著した。

- 29) アズハル学院に学び、オラービー革命に参加して国外追放となったムハンマド＝アブドゥフは、パリでアフガーニーとともにアラビア語雑誌『固き絆』を1884年に刊行した。前掲13) 475-481頁に収めるプラントによるアブドゥフのインタビュー記事(1884年)は、「もし回教徒の軍隊がロンドンの街路に現われたら、イギリス人だって狂信的になるだろう」といった非対称な世界への重要な指摘を含んでいる。なお、イスラム改革運動の伝達には、イスラム世界の知的な共通語としてのアラビア語の存在のほか、近代的なプリントメディアや国際的な郵便網といった「文明」の活用が少なからぬ役割を果たした。小杉

泰編『宗教の世界史12 イスラームの歴史2 イスラームの拡大と受容』山川出版社、2010、34-35頁。

- 30) 板垣雄三「世界分割と植民地支配」(『岩波講座 世界歴史22 帝国主義時代1』岩波書店、1969)、135-152頁。
- 31) 森 元齋『アナキズム入門』ちくま新書、2017、169-216頁に、「歩く人」としてルクリュが紹介されている。本巻の「訳者あとがき」にもあるように、アナキストや在野の自学自習者として「もろもろの強大な共同幻想から自らを疎外しあるいは疎外された状況」が、ルクリュを「自由な人間としての良識に立脚しようと努める態度」に導いたのであろう。